

令和 5 年 5 月 13 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K03094

研究課題名(和文)高齢者のコミュニケーションの変容と発達：認知症から知恵・英知・孤高に至る総合研究

研究課題名(英文)Transformation and Development of Communication in the Elderly: A Comprehensive Study from Dementia to Wisdom and Solitude

研究代表者

佐藤 真一 (SATO, Shinichi)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：40196241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、孤立と孤独によるコミュニケーションの途絶と対処、加齢に伴う認知機能の変化と認知症によるコミュニケーション、および中年期以降に遭遇するライフイベントに関わる総合的な研究計画をある程度は進めることができた。しかし、研究開始後3年目以降はCOVID-19が続いて高齢者からの新たなデータ収集が困難になったため、従来の研究の集大成を主な目的としつつ、可能な範囲で新規の研究も行った。その結果、「心理老年学と臨床死生学」と題する専門書籍を執筆・編集することができた。新規研究としては高齢者施設での看取り、記憶愁訴に関わる尺度開発、自動車運転と大脳白質病変の関連性などを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢期には数多くの困難なライフイベントに遭遇する。そのうち、本研究課題では、高齢期における孤立と孤独、加齢に伴う認知機能の変化と認知症、および看取りを取り上げ、それらに対する課題解決に人と人との関係性、すなわちコミュニケーションが重要な役割を果たすと考えた。高齢期においてこうした問題に遭遇した際の苦悩を乗り越えるために、他者との関りを通じて思索を繰り返すことが、人に知恵と英知を授け、孤高という高みに導き、生涯発達を促すことを示唆できたことが、本研究成果の学術的意義と考えられる。

研究成果の概要(英文)：To some extent, this research project was able to advance a comprehensive plan of research on communication breakdown and coping due to isolation and loneliness, communication due to age-related cognitive changes and dementia, and life events encountered in middle age and beyond. However, since COVID-19 continued to make it difficult to collect new data from the elderly after the third year of the study, we conducted new studies to the extent possible, although the main objective was to compile existing studies. As a result, we were able to write and edit a technical book entitled "Psychogerontology and Clinical Thanatology". New studies include end-of-life care in elder care facilities, development of a scale for memory complaints, and the relationship between driving and cerebral white matter lesions.

研究分野：臨床心理学

キーワード：高齢者 コミュニケーション 認知症 孤立・孤独 知恵・英知・孤高 生涯発達 死生学

## 1. 研究開始当初の背景

孤立・孤独、危機的ライフイベント、認知症などの認知的変化等の高齢期に陥る可能性の高いネガティブな体験の制御に関するこれまでの研究成果を通じて、個性の発達と人生の完成に至るためには、これらの個人的体験に対する内省とコミュニケーションによる分かち合い(共感)の過程が不可欠であると予想される。

我々の孤独感研究では、独自志向性特性による孤独感制御を示すとともに、多様なコミュニケーションによって「孤高」の高みに至る可能性が示唆された。そこで、危機的ライフイベントの渦中であっても、結晶性知能を基礎とした内省の累積が知恵と英知の発達を促すと仮定した。

また、認知症高齢者は、安定した生活を送るために不可欠な日常的なコミュニケーションが圧倒的に欠如していることが明らかとなった。コミュニケーション機能把握の方法を開発し、認知症者の個性実現と安寧な生活の獲得過程を検討することを課題とした。

## 2. 研究の目的

### (1) 高齢期の孤立と孤独

これまでの我々の研究は、一人でいることを好む志向性(独自志向性、Preference for solitude)が孤立状況にあっても感情的ウェルビーイングを高めることを明らかにした(豊島・佐藤, 2015)。一人でいることを好む特性が、個人の内省力を高め、老いと死にまつわる高齢期の危機的課題の解決能力を高めることが予想される。老年期におけるこうした発達の側面を捉えるために、人生の高みから世間を俯瞰する能力とその特性を「孤高」として捉えることを独創的な視点と考えている。孤高の境地は、他者を排除する特性ではない。独自志向性とともに他者との親和性も高く、コミュニケーションの能力も高度な状態と捉えている。

本研究の具体的な目的は、一人で過ごすことを好む志向性が中高年期における居住形態・婚姻状態といったライフスタイルと関連するかを検証することとした。

### (2) 認知症のコミュニケーション

介護の訳語であるケアは、文字通り自立が脅かされている相手への心配や愛情を心理的基礎として世話をすることである。しかし、そこには同時に、相手を拘束し、束縛する行為となる可能性とそれに伴う支配や強制という心理規制が働いてしまう可能性が併存しているということを見逃してはならないであろう。ケアがコントロールに変容してしまうことは、認知症高齢者に対する虐待として社会的問題になっている。本研究では、認知症介護に関する事例に基づいてケアとコントロールの問題を検討する。

また、認知症の人とのコミュニケーションの困難さの背景には、社会的認知の低下が想定されている。本研究課題では、自閉症児の社会的認知を測定する誤信念課題等を参考にして、新たに高齢者用の画像による社会的認知測定課題を数種類作成し、デジタル化する。

さらに、加齢に伴う認知的フレイル、軽度認知障害(MCI)、軽度認知症等の高齢者には、記憶愁訴が多く認められ、家族の心配や懸念なども問題になっているため、記憶愁訴の基になるメタ記憶に関する尺度開発を進めている。

高齢者の移動はコミュニケーションの有無と大きくかわるが、その手段としての自動車運転が社会的問題となっている。高齢者の自動車運転事故は身体的反応の機能低下と認知機能低下が問題になっているが、我々の直近の研究は、運転を継続中で認知機能に問題の無い高齢者でも、大脳白質病変の存在によって、判断能力の遅延と低下が事故につながる可能性のあることを実証する。

### (3) 知恵・英知・孤高の構造とコミュニケーション

高齢期には種々のライフイベントに遭遇する。親の死、自分や配偶者の大病、定年退職、友人・知人の死、配偶者の死、施設への入居、老化の進行などのライフイベントに遭遇することは、人生にとっての大きな危機に直面することでもある。生活の質(Quality of Life; QOL)は低下し、生きる意欲すら失ってしまうこともある。高齢者とは、若き日の苦難を乗り越え、仕事や家庭での喜びを謳歌してきた一個人としての誇りある自己と、次々に遭遇する危機にうろたえる情けない自己を同時に経験している不確実な存在である。しかし、高齢期に出遭う危機に対して物質的な対処とともに、主体的な内省を行うことによって、「苦難の先にある果実」を手に入れることができる。癌を患うことによって、癌の苦しみを当事者として経験できるだけでなく、自らのことのように共感し、同情してくれる家族、友人、知人、医師、看護師たちの存在を知ることが、人間観と死生観を大きく変容させ、コミュニケーションの質的变化をもたらすに違いない。こうした経験の積み重ねが、人生の知恵となり、英知となること、病気の孤独から人生を俯瞰できる孤高の境地に変貌することを、理論的背景を確立しながら調査によって実証することを試みる。

### (4) 看取りとコミュニケーション

高齢者施設における看取りが増えている。人口動態統計によると、「介護老人保健施設」と「老

人ホーム」で亡くなる人の割合は、比較可能な最初の年である 1995 年は 1.7%だったが、2017 年には 10%を超えた。高齢者施設でのケアの主な担い手は介護職員であり、職員は比較的長期にわたり利用者と関わることが多い。それゆえ、利用者の死は介護職員にとって大きな負担になり得る。喪失に対するさまざまな心理的・身体的症状を含む感情的反応である悲嘆は、家族など個人的に重要な他者の死に対してのみでなく、職業上の関係においても生じる。

介護職員が利用者の死を幾度も経験することが予想される中で、そうした否定的な影響は可能な限り予防されることが望ましいであろう。本研究では、悲嘆による否定的な影響へ 1 次的な予防という観点から、悲嘆に影響を与えると考えられ、かつ、職員研修などで看取りの前から取り扱うことができる要因として、死に対する準備性と看取りケア効力感に着目し、悲嘆との関連を臨床死生学的観点から検討する。

死に対する準備性は、ある人の死に対して自分がどの程度準備できているかという個人の認識であり、死にゆく本人とのコミュニケーションを通じて死別後の悲嘆や不適応を低減させる。

一方、看取りケア効力感は、社会的学習理論に基づき、介護職員を対象として提唱された概念であり、自分は看取りケアに必要な行動(看取りケア行動)をとることができるという信念と定義される。看取りケア効力感の高さは、積極的な看取りケア行動に繋がると仮定され、具体的な看取りケア行動を自分がどの程度できると思うかを尋ねる尺度で評定される。これまでのところ、看取りケア効力感と悲嘆との関係は未検討である。しかし、良く関わったという思いが良かったと思える終末期ケアに繋がるといふ指摘があることから、看取りケア効力感を高く持ち、積極的にコミュニケーションとケアに取り組んだ結果、悲嘆が低減するということが予想される。

### 3. 研究の方法

以下に、本研究課題における研究を 4 領域に分けて、特に重要な成果と思われる内容について具体的に記載する。

(1) 孤立と孤独：中高年者における一人で過ごすことへの志向性と居住形態・婚姻状態との関連  
対象者は、高齢期群として 69-71 歳の男女 500 名(男性 250 名, 女性 250 名), 中年期群として 49-51 歳の男女 500 名(男性 250 名, 女性 250 名)とした。調査は Web 上で実施した。

質問項目は、Preference for Solitude Scale: PSS 日本語版、居住形態・婚姻関係、日本語版 UCLA 孤独感尺度第 3 版、Big Five 尺度短縮版、および日常生活における社会的活動頻度であった。

(2) 認知症の人とのコミュニケーション：ケアとコントロール

社会福祉法人大阪府社会福祉事業団の協力を得て、認知症の施設利用者の事例を収集し、事例集を作成・公開した。本研究課題に関して、コミュニケーションと社会的認知の観点から検討し、日本学術会議が編集協力を行っている「学術の動向」誌に掲載された事例を紹介する。

(3) 知恵・英知の機能的側面と構造的側面

退職、配偶者の死、大病などの高齢期におけるライフイベントを体験することで一時的に孤立・孤独に陥ったとしても、成人期以降も発達が続く結晶性知能に基づく内省によってそれを乗り越えることができること、そして、そのような経験の蓄積によって「知恵(智慧)」と呼ばれる問題解決能力と「英知(叡智)」と呼ぶ未来を見極める能力が発達する事例を見いだすことができた(佐藤, 2015)。本研究では、従来の「知恵」の定義を再検討して、新たに独自の理論化を試みることを目的にし、仮説的理論を示したうえで、実証的な研究ステージに移行することを目的とした。

(4) 看取りの準備性と看取りケア効力感

本研究は、調査項目は基本属性に加えて、悲嘆の程度を測定するために、項目内容から介護職の悲嘆を測定するのに妥当であると判断した Texas Revised Grief Inventory-Present Scale (TRIG) 16) を邦訳して使用した。また、介護職として直接関わった利用者について、「施設内で亡くなり、臨終に立ち会った(施設内立会い有)」、「施設内で亡くなったが、臨終には立ち会っていない(施設内立会い無)」、「看取り契約を結ぶなど、看取りケアと認識してケアを行ったが、最後は病院など施設外で亡くなった(施設外)」の 3 つの状況に分けて経験回数を尋ね、その合計を看取り経験回数とした。

死の準備性については、情報的準備性と情緒的準備性の 2 側面を測定した。また、看取りケア効力感は、「その利用者の看取りケアに関わる前、あなたはどの程度看取りケアに必要なケアを提供する自信がありましたか」と尋ね、0~100%の間の整数で回答を求めた。

### 4. 研究成果

(1) 孤立・孤独：中高年者における一人で過ごすことへの志向性と居住形態・婚姻状態との関連  
Preference for Solitude Scale: PSS 得点は、孤独感(中年期群:  $r = .54$ ; 高齢期群  $r = .49$ )との間に中程度の正の相関が見られた。性格特性との関連については、情緒不安定性(中年期群:  $r = .30$ ; 高齢期群  $r = .21$ )との正の相関、外向性との負の相関(中年期群:  $r = -.48$ ; 高齢期群  $r = -.45$ )が見られた。日常生活に関する変数との相関について、PSS の得点は友人との接触頻度と負の相関(中年期群:  $r = -.28$ ; 高齢期群  $r = -.34$ )、一人で過ごす頻度の高さと正の

相関（中年期群： $r = .34$ ；高齢期群  $r = .31$ ）が見られた。

居住形態と PSS の関連を分析するため、2（高齢期・中年期） $\times$ 2（一人暮らし・同居）の 2 要因分散分析を行った。その結果、年代群（ $F(1, 996) = 24.55, p < .01, \eta^2 = 0.02$ ）と居住形態（ $F(1, 996) = 6.17, p < .05, \eta^2 = 0.01$ ）の主効果が有意であり、一人暮らしの者は同居の者より PSS が高いことが分かった。なお、交互作用は非有意であった。

婚姻関係と PSS の関連を分析するため、2（高齢期・中年期） $\times$ 2（婚姻関係有り・婚姻関係無し）の 2 要因分散分析を行った。その結果、年代（ $F(1, 996) = 40.10, p < .01, \eta^2 = 0.04$ ）と婚姻関係の有無（ $F(1, 996) = 13.66, p < .01, \eta^2 = 0.00$ ）の主効果が有意であり、年代 $\times$ 婚姻関係の有無の交互作用（ $F(1, 996) = 4.74, p < .05, \eta^2 = 0.01$ ）が有意であった。交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った結果、中年期では配偶者の有無の効果が有意であったが（ $p < 0.01$ ）、高齢期群では非有意であった（ $p = 0.32$ ）。配偶者の有無については、配偶者有り群、無し群ともに中年期の方が高齢期よりも得点が高かった（ $p.s. < 0.01$ ）。よって中年期で配偶者のいない者が最も PSS の得点が高く、中年期群でのみ配偶者の有無による違いがあることが分かった。

居住形態との関連について、一人暮らしの者は PSS が高いことから、中高年期において一人暮らしをしている者は一人の時間を好む心理特性を持つことが明らかとなった。

婚姻関係との関連について、中年期で配偶者がいない者は、一人の時間を好む傾向が特に強いことが分かった。高齢期では、配偶者の有無の違いが中年期ほど見られなかったことから、中年期の方が PSS の高さが実際の婚姻関係に反映されていることが分かった。中年期の者は、高齢期よりも現代的な価値観を持つことにより、個人の志向性が実際の婚姻関係に反映されていると考えられる。現代社会では、ライフスタイルが多様化したことにより、一人で過ごすことが好きである心理特性が配偶者を持たないという選択に繋がる可能性のあることが示唆される。今後、一人の時間を好む心理特性を持つ独身の者が将来高齢になり、社会的孤立に陥る危険性が高まるか検証する必要がある。

## (2) 認知症の人とのコミュニケーション：ケアとコントロール

認知症介護についてケアとコントロールの観点から検討して「学術の動向」誌に掲載された事例を紹介する。

場面 1：認知症の母親と介護する娘

状況：認知症の母が夜中に起き出し、夕食で残った味噌汁の入った鍋を火に掛け、忘れて寝てしまった。鍋の焦げるにおい気づいた娘が、母親を起こして問い詰める。

娘「鍋が焦げちゃったじゃないの！ 火事になったらどうするの？」

母は、翌日、鍋を買いに近所の荒物屋へ行き、帰りに迷子になり、近所の人を連れ帰った。

場面 2：認知症の祖母と介護する母と息子

状況：ある夜、小学生の息子が母親と認知症の祖母が寝る部屋の前を通りかかると、

母「お婆ちゃん、死んじゃおうか？」

祖母「死ぬのは怖いよ。嫌だよ。」

という会話を耳にしてしまった。

息子は、母と祖母は手首を紐で繋いで寝ていることを知っていた。

状況の分析

場面 1：火事になるのを恐れている娘と鍋を焦がしてしまったことを責められていると思込んだ母の心がすれ違っている。

場面 2：介護に苦しむ母の独り言と、その言葉の表面だけを捉えて怖がる祖母の心がすれ違っている。

以上に関して、目的に示した介護場面におけるケアとコントロールの観点から検討した。



図 1. 認知症高齢者の社会的認知測定用の情景画の一例

また、認知症の社会的認知の測定課題を数種類作成したので、そのうちの情景画1つを紹介する(図1)。この情景画に描かれている女の子と男の子のコミュニケーションの様子を説明してもらう課題では、予備的研究の結果から、認知症の進行に伴って、同時失認と呼ばれる部分的回答、例えば、女の子の身体が震えていることにのみこだわるような回答など、健常高齢者では認められない社会的認知の低下による反応が見られた。

### (3)知恵・英知の機能的側面と構造的側面

一般的に知恵は、成人期以降における理想的な心理状態として理解されているが、その概念に関する見解はいまだ不明確である。我々が心理学評論(2019)に発表した「知恵は発達するか：成人後期における知恵の機能的側面と構造的側面の検討」では、知恵の定義と測定、および発達に関する研究をレビューして、知恵の概念を検討した。その中で、我々の研究で新たに理論化した知恵の内容を「機能的側面」と「構造的側面」という2つの観点から包括的に解釈すべきであることを論じた。すなわち、知恵を機能と構造の2側面に分けて捉えると、知識や能力、成果のように、テストの得点やパフォーマンスの観察に基づいて直接的にその能力や様相を把握することができるもの(機能的側面)と、内省や感情調整などのように、直接的に把握しにくく、個人の内観報告によらなければならないようなもの(構造的側面)があることが分かった。こうした各側面の性質に応じた方法でテストバッテリーを組むことで、個人が有している知恵の量をより包括的に捉えることが可能となることが期待される。知恵の発達における非連続的な特徴や、心理的要素の加齢変化についても、この包括的な枠組みを用いて検討できると考えられた。

本研究の後、海外文献との比較の上で、日本人における知恵概念に関する面接調査を行い、老年社会科学誌(2020)にその成果を発表した。

### (4)看取りの準備性と看取りケア効力感

本研究は、Web上で行い、有効回答数は399であった。悲嘆を従属変数とした階層的重回帰分析の結果、死に対する準備性から0.1%水準で有意な負の主効果( $\beta = -.28, p < .001$ )、看取りケア効力感から有意傾向の正の主効果が確認された( $\beta = .13, p < .10$ )。さらに、死に対する準備性と看取りケア効力感との交互作用が1%水準で有意となった( $\beta = -.22, p < .01$ )。単純傾斜の検定の結果(図2)、死に対する準備性が低い(死に対する準備性 - SD)人では、看取りケア効力感が高い方が悲嘆は有意に高くなるが( $\beta = .33, p < .01$ )、死に対する準備性が高い(死に対する準備性 + SD)人では、看取りケア効力感が悲嘆に与える効果は有意とならなかった( $\beta = -.05, n.s.$ )。

本研究の結果、介護職員が利用者の死に対して悲嘆を感じることで、中でも利用者の死に対する否認は少なく、思慕の念は強い傾向にあることが示された。また、死に対する準備性が悲嘆を低減させること、そして、看取りケア効力感は悲嘆を強める傾向があるが、死に対する準備性はその影響を緩和することが示された。死に対する準備性を高める具体的な方法としては、死に関するコミュニケーションの重要性が指摘されている。看取りに関して率直に話し合う環境を作ること、死に対する準備性を高める一助となるであろう。

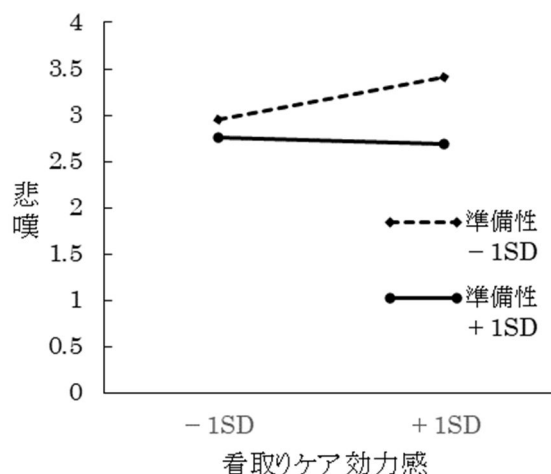


図2. 死に対する準備性と看取りケア効力感との悲嘆に対する交互作用

#### <引用文献>

佐藤眞一 (2015). 『後半生のこころの事典』CCC メディアハウス.

豊島彩・佐藤眞一 (2015). 孤独感統制下における独自志向性と感情的ウェルビーイングの関連性の検討, 心理学研究, 86, 142-149.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Oba Hikaru, Park Kaechang, Yamashita Fumio, Sato Shinichi	4. 巻 12
2. 論文標題 Parietal and occipital leukoaraiosis due to cerebral ischaemic lesions decrease the driving safety performance of healthy older adults	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 21436
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-022-25899-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 久保田彩、佐藤真一	4. 巻 43
2. 論文標題 高齢者施設で看取る介護職員の悲嘆 死に対する準備性と看取りケア効力感に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤真一	4. 巻 218
2. 論文標題 超高齢社会を生きる 孤立、孤独を超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ayaka Kasuga, Shinichi Sato, Masami Takahashi	4. 巻 7
2. 論文標題 Japanese people's conceptualization of wisdom: Qualitative analysis of interviews with middle-aged and older adults.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Osaka Human Sciences	6. 最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/78942	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 豊島彩・佐藤真一	4. 巻 2
2. 論文標題 日本版UCLA孤独感尺度(第3版)短縮版の開発 多世代での使用に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 老年臨床心理学研究	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤真一	4. 巻 24(5)
2. 論文標題 認知症ケアで大切なこと 介護場面における「ケア対コントロール」と日常会話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 37 - 43
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ueno Daisuke, Masumoto Kouhei, Sato Shinichi, Gondo Yasuyuki	4. 巻 45
2. 論文標題 Age-Related Differences in the International Affective Picture System (IAPS) Valence and Arousal Ratings among Japanese Individuals	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Experimental Aging Research	6. 最初と最後の頁 331 ~ 345
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/0361073X.2019.1627493	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 春日彩花・佐藤真一・Masami Takahashi	4. 巻 41
2. 論文標題 日本人における「知恵」の概念 中高年世代を対象とした面接調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 379-389
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島内 晶・佐藤眞一	4. 巻 69
2. 論文標題 高齢者の記憶錯誤：虚記憶およびメタ記憶からの分析と精神的健康の関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体力科学	6. 最初と最後の頁 193-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7600/jspfsm.69.193	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Aya Toyoshima and Shinichi Sato	4. 巻 online first
2. 論文標題 Examination of the effect of preference for solitude on subjective well-being and developmental change.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Adult Development	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10804-018-9307-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 春日彩花・佐藤眞一・Masami Takahashi	4. 巻 61
2. 論文標題 知恵は発達するか 成人後期における知恵の機能的側面と構造的側面の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 384-403
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件(うち招待講演 3件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 久保田彩・佐藤眞一
2. 発表標題 介護職員の死に対する準備性と個人要因および施設要因との関連
3. 学会等名 日本老年社会科学会第64回大会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 新田慈子、佐藤眞一、大庭輝
2. 発表標題 日常会話式認知機能評価(CANDy)と社会的認知機能の関係性の検討
3. 学会等名 第22回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 島内晶、佐藤眞一、西村昭徳
2. 発表標題 メタ記憶と主観年齢との関連 - 記憶の自信度と記憶の衰え自覚に着目して -
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新田慈子・佐藤眞一・大庭輝
2. 発表標題 コミュニケーション機能評価尺度の作成と妥当性の検討 社会的認知機能との関連性から
3. 学会等名 第21回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大庭輝・佐藤眞一
2. 発表標題 日常会話式認知機能評価の項目別の比較検討
3. 学会等名 第62回日本老年社会科学学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 新田慈子・佐藤眞一
2. 発表標題 認知症高齢者における社会的認知機能測定法に関する研究
3. 学会等名 第20回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Oba, H., and Sato, S.
2. 発表標題 Factors associated with conversational assessment of people with dementia.
3. 学会等名 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Region Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤眞一
2. 発表標題 老年学と死生学をつなぐ
3. 学会等名 第60回日本老年社会科学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kasuga, A., Sato, S., and Takahashi, M.
2. 発表標題 Exploring components of wisdom for Japanese older adults.
3. 学会等名 The Asian Conference of Aging and Gerontology 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamamoto, M., Tokugawa, Y., Oba, H. and Sato, S.
2. 発表標題 Conversational assessment of neurocognitive dysfunction.
3. 学会等名 33rd International Conference of Alzheimer 's Disease International ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤真一
2. 発表標題 認知症ケアにおいて大切なこと：老年心理学からのアプローチ
3. 学会等名 日本心理学会公開シンポジウム「認知症医療への心理学的貢献」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島内晶・佐藤真一・西村昭徳
2. 発表標題 高齢者におけるメタ記憶とソーシャルサポートとの関連 精神的健康度に及ぼす影響についての検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 佐藤真一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 西東社	5. 総ページ数 224
3. 書名 身近な人が認知症になったら	

1. 著者名 大庭輝、佐藤真一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 184
3. 書名 認知症plusコミュニケーション	

1. 著者名 日本心理学会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 188
3. 書名 認知症に心理学ができること	

1. 著者名 佐藤 真一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 心理老年学と臨床死生学	

1. 著者名 佐藤真一監修・大阪府社会福祉事業団編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪府社会福祉事業団	5. 総ページ数 295
3. 書名 認知症ケア [ 事例集 ]	

1. 著者名 佐藤眞一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 光文社	5. 総ページ数 298
3. 書名 認知症の人の心の中はどうなっているのか？	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大庭 輝  (Oba Hikaru)		
研究協力者	豊島 彩  (Toyoshima Aya)		
研究協力者	春日 彩花  (Kasuga Ayaka)		
研究協力者	久保田 彩  (Kubota Sayaka)		
研究協力者	島内 晶  (Shimanouchi Aki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西村 昭徳  (Nishimura Akinori)		
研究協力者	新田 慈子  (Nitta Yoshiko)		
研究協力者	高橋 正実  (Masami Takahashi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Northeastern Illinois University			